



誹諧古今句鑑

中村俊定文庫
文庫 18
536
!



誦諧古今句鑑序

凡誦諧は撰集を以て流傳の論ハ古今の
諸書小詳なきハ爰小いも凡今採りさるるは
つと小及ていしを採り求むる人何れ中古小
公とある人あり故小其師家流風匡まり
さるハ唐やまると乃款も代りの凡調ふる者
といふと秀逸不致てハ又小新古の論を誦諧ハ
殊小要法とていひて速きハ古と不易れ各吟を
見俗小も難矣し竹る唯以てハ親句と好む



誦句ハ稀々也貞享元祿ハ一變セリ今ハ誦句と
考トシテ親句ハ絶てなき。如ク今ハ即ちむきふ
古風と心得捨る人も亦多かりしを誦句ハ詞が
くして情深くいひおむる成むいとをれいふも
當時の風俗小阿つた事ハ抑和歌ハ六義有
十辨あり流傳も其各義不たらひて先哲所と
りら至正此れと句作ハ親誦のふゆと云はれ海を
親誦とて句の新古を論せむ戸予竊ハ是と
おもふなり年何と能くふいとせよとの先づ
かゝる方より古今句鑑と題シ一小冊と得る

編る所の趣意いふと控は今ふたつあり親誦ハ
片寄りのして志の不易の句也世にハかく已むは
き人もたざるものや訪ひて決らんも神祕の位
なきハいつちいふる人ハ撰者の名もあく存亡の
程さへありがくしよつて只何やく床の思ひに
の其ほけ撰の句準ハあつくとおぼしき古今此
句と書添又むとをよく志傳せしといつとす四時
四巻とハたまたまきこ又つて門一志の人く何りて
けよと又中今ハ字とらんも筆の号ありこれ
梓行して各得むことを求むるも撰の如し

おけ道ふむ秘くする人小悟りなれどもあつねと
初学の人不易の所入りつゝハ流行ハ修し得て後
自在なるとの微意小記きハ振り小増補せ罪
ゆるしめんと志のふ

荏五神田玉池

谷素外誌

安永五年丙申秋

凡例

一 け撰初学此助とならん事とせしむハ古今了
せえある句といふも不易あるを除去せしむと
又えり予其意とて増補し修るの如し撰
の句準ハ何れもさる句なきハ其記題也とて
とせしむ
一 題の序次ハ通俗志小傲不部難小あく柳
最後の遠いものあり
一 諸書の季よむもさきもの今昔小行つゝ物あり
是示其句の表りありハ出寸但行事の内



誹諧古今句鑑 春之部



歳旦

朝夕乃人もめつろし大坂ふれ去大坂梅翁
 年の花もほのく大坂初桜 季吟
 元日や何ふ多き心大坂朝や大坂幸 忠知
 赤意の松客も大坂吟大坂かす大坂西雀
 年大坂のや大坂春年の礼ハ星月夜 其角
 元日や大坂たれて花乃物大坂う大坂と大坂 鼠雪

竝東冥西まで幸の遠ふもの何りけ難句法
 趣意とておふせよ
 句の次第ハ古人とて先と今世乃人ハ高貴
 又ハ其師家よりとてとも筆のまふく裁之
 一古人の句ハ再案とて一ハ不筆一ハ不筆
 何り又書字の誤とて何りも者正一ハ不筆
 何り一もとる備ふま一ハ不筆一ハ不筆一ハ不筆
 一ハ不筆一ハ不筆又何句とて何者一ハ不筆何り一ハ不筆
 志一ハ不筆と一ハ不筆恨一ハ不筆但一ハ不筆何者一ハ不筆何り一ハ不筆
 何り一ハ不筆何り一ハ不筆何り一ハ不筆何り一ハ不筆
 何り一ハ不筆何り一ハ不筆何り一ハ不筆何り一ハ不筆

凡例

元日やされハ世川の多乃春 大坂 素山
 かのくと馬くらむや葛城山 野坡
 蓬萊に児遠かる目也こしよ 大坂 山店
 老々眼子よしくそり初曆 大坂 法策
 不登白し唯春たのといふ斗 心祇
 舞あらしまき流るふれ人通 荻狐
 人ハ哉士星を梅とさう明ふける
 提燈ふけりうとあむ旦二那 作志
 浦のまふも花を以て明る危 凉城
 木州まで女男のましくらやま 栗堂

明て春大魚うかまむ 海乃面、
 今法神代もや人の代や初辰 梅邨
 系初や大振袖るり言けむむ、
 初東風の袂う系 朝ほく希 呉夕
 物乃具と飾る法代かみ餅 絶亮
 ひくく井の深や立乃ほる初裏 素芹
 元日の賓客や礼や我あく海 志簾
 春きりや人かめくと葛城山 履 不言
 うらむいふふ又曙や 雑煮 三
 若きもあらしやふとせれま 宝馬

年々るは時夜ハ寐ぬ故去虎 久遠 輕舟
 玉やほのろ小告る業代塔 平砂
 初更やものを学くけし海 津富
 粧ひや七日を侍るぬ人の春
 け今朝の雨を十日にさしめ哉 花籃

早春

松とらとて常の旭とあり子危 不角
 去もやぐ礼義和しく女の家 春来

沖乃して梅ふちう川在礼若達 蒼狐
 多進ハ益意て来より女を察 一
 伝連繩小古井の水も去めきぬ 春邦
 若解ふ肌脱初る下部 可か 寶馬
 進明や脊丈伸てもむすめの子 久遠 玉圍

七種

七々片や初ふりかて 朝 焉 其角
 七種や陸尺部屋も負ぬ 喜 笠跡

若菜

年玉乃菜もさしし親の里 宗瑞
 雛宿や若菜指す川むらひ 雅邨
 ちろほらとま試ま若菜指 菊人
 朝野海や雪宵の若菜笑ひけ 慎我
 若菜指すの初ものや都人 菊十
 夕日よ初ありれりのな若 木丹
 若菜つとささるるに日もゆま 李克

削葱

削かけ古まやむ月の家 榎 左簾
 柳とハ誰をさる髪此削葱 一
 凡そよく新踏のをや削かけ 佐幸

蕨入

蕨のや海州くけて芝の海 琴風
 蕨入り我あたのく文ふ危 寥和

菽入やそらぬ日数を伯母のほと
やぬ入や花より芝長ぬうらう寸
菽入の我衣と浅き姿う那
やふいアや却の水を唐にけき
五連 笠歌 素芳 津富

雪消残雪

一物もなるとや消て雪佛
交はらぬとまゝして奈消を雪仏
とくや風梅足きむとて雪の封
風虎 文性 涼山

雪とけやおむひまあそ子如きう嶽
雪を解りや降り子満をゆき横足新
雪なぐハきくうんものやま代不二
左麓 津宜 木丹
鳥の叫ぶ人ふかきうて
京 貞室

春雪

春の雪雨くらふ足ゆる阿をまき也
淡雪やまれものとして漂う隙
加賀 一矢 養孤

積り得ぬ雪や本芽ふ笑ひて 貞知
昼寐して情やまよそ春の雪 雪高
きたりし跡やちりりと雪のかりを 貫太
ふるやと記すやそ記す雪の雪 素云
泡雪や柳の葉うめ乃 露 左籾

梅

雖波津ふ明夜れるや梅花 梅翁
とハ匂ふ梅や自方の私あり世

さく梅のうほと目せられたるや 玄札
梅の香おの川と見ゆる山海抄 とも
梅ちりてまきり後ハ天王寺 伊丹
梅の香ふまきり笛や山曹子 大坂
まきりした枝の裂めやうめのを 其角
梅一輪一ふんおとのあてりさ 嵐雪
叶梅とさるよた月の匂ひ知 千川
志ら梅やまきりうふ家山なきあふ 綱柯
照るや梅たととハ早のあふおふを 野坡
皆くふ笑梅とねと梅花

梅と花と相も少くはつめの花
 見としよ名もいかに 毒花 伊勢 乙 由古
 古寺や方毎ふ足さる 梅一木 柳居
 梅の香や隣子の外了猫の声 安士
 梅咲て雪さくらぬ鳥も 明 春未
 うめの香や 是もきこてをきもの 加賀 希因
 梅はくや心のちさるる けしき 加賀 涼伴
 字の多しや何々 降ても春とを共 加賀 千代尼
 梅の香や戸枕の香は 是もぬと 一
 古義や梅よとて去る 加賀 蒼狐

数もれて一枝さねぬうめの花
 人鬼はるりとあやうき 字のたのむ
 涙への梅 咲よけり 樹屋の梅
 是代言 従て梅のゆきふやも有 万立
 枝とていふさきとよはるる 梅の若 栗堂
 梅白く浅黄ふあはれは 初 貞和
 梅の香や雪てそく 登此 候 亀文
 遠るやひくと色 梅の風をく 一
 去地よりて 梅の梅はあふりか 雅郎
 梅さくやもりや 雪はもころく 一

梅の香や 縦屏をそかきくふも きくと
 常の氣のつうぬ末社あり梅をも 素竹
 捨植の梅小客らりり下を夜 公曳
 初梅やりのいろにふれかきく 初
 咲くつりては梅のふもす 吐鳳
 早白くぬ里や梅く枝のか減 曳尾
 梅咲てあきぢの茶も薫く 梅扇
 香とほき梅ふぬきるあが 宝烟
 梅の香や鼻うくさきるあが 沾我
 あ茶をく梅不菓をくふ日 和北
 寒 聖

雲とけきもいづくぬりりや梅む 好義
 梅既乾蝕ふ花さるる 素角
 入おふ一線白く砂路の梅 素角
 雪のく急も又え透 露梅が 露得
 梅くやけさふところ 土籠 第路
 結精をまけ白ひや梅のまけ 水樹
 老梅のむくくを白ひく 何来
 肥らさるいぬれを梅のまけ 左麓
 梅のまや思れくまきと 五陣
 二月と梅ひとらして 春堂

八尋の梅 残る枝あり 笑ふ一亀 南部 乙 外
縁さしたる日 出まききぬ 神の梅 笠 祓
にふ人の心と なまぬ 梅 足 引 宝 馬
とちくこれ 呼吸 急き色 梅 子 猫

此書のところを

おて居 芳山 ぬり 何れ 垣乃 梅 治 徳

池邊

鯉乃 音 水 月の くらく 梅 去る 一 羽 笠

北を對して

るの中 ぬ 春 舟と 梅乃 木 少 外 嵐 雪

郊外

梅乃 音 川 人や 履 斗 目 小 投 既 巾 栗 水

閑居

庭 掃 け 八 神 影 一 一 や 梅 乃 影 栗 堂

管神奉納

随 才 の 弓 矢 中 一 け 一 梅 乃 音 把 菊

若草

若 草 や 虫 橋 の 縁 を ぬ 出 一 一 抑 居

あやや麻も高うけふ山乃裾 和
くささや梅ふたのはるぬうら 秋
着ら片や小川流るく峰の中と 不
言 色 水

土筆

うらや神にけくもの土筆 大坂 玖也
黒胡麻て家茂あぬはつくく 其角
はくくしおふも物やかく斗 左 簾
ま乃路ふ夏毛の土筆 冬 雀舟

細赤

勤くやも見えで細うら 京 森の赤 公来
細うらの遠うみひより 京 行 露

猫妻窓

窓をばそ忍ひをく 京 や猫の窓 昌房
誰猫子棚くく 京 乃 敷 沾 徳

猫の恋初てくく啼てををしり
 うらやまし思ひ切時祢この恋
 さるる猫おまへはあまぬ命うらな
 出て之日人ならいふねこの恋
 氣とる思案の外や猫乃恋
 何なるよやむ時ハ止む祢あ
 の恋
 うら猫のうき名ハまぬ屋根り
 うらくの恋や猫乃恋
 異くおや恋芳はる猫の恋
 野坡
 越人
 己松
 貞佐
 樓川
 小知
 笠衣
 何来
 宝馬

白魚

志ら魚や石小障りハ情ぬつし
 白うその一腰序や以境
 志ら魚れ白き白以や松の表
 白魚乃うらまみなるは後表は障
 松風
 壺中
 之道
 馬光

春日

まん丸小出れとち記す春日外
 山崎
 宗禮

去の水をさるくに又ゆるが 鬼貫
 日の去と流石小宿の歩に於 其角
 不二小宿て三月七日 八口京 信徳
 之川の鯉をぬる又ゆ矣此池 仙化
 矣一き継うきさり矣の水 舟泉
 矣や動く田螺やうく時乃如 風松
 水を日や仲志め本此弱る春 野水
 春めくや人さぬくのいせ系り 高与
 ちき日や月一奉して秋の波 馬光
 乃とけさや何その序三は月 乾什

去の日は静ふある 杵乃吉 冬伯
 芥乃葉の日は一小室一はの去 梅邦
 妙ふころ山よんところ矣此初 栗堂
 天我を俄て人を捨るや春日和 涼山
 田小宿乃まじ喜室を旭のな 池亮
 盆石小宿のちれ汗や去乃南 来道
 山陰や樹まはる哉の叶れ矣 玉圃
 世の去ふそけものさるめ 横船
 ちき日やまてととくわし 舟
 字を乃侍るや日る日のちは 平砂
 素人

日小肥る野のこもりや夾の水 津富
日や縹 地龜ふたまる水の泡
頭走るや柳のもろれ蟹乃穴 岩槻 雀郎
初て室言ふをうらや年をるて
張の山と先根わき北は日けき也 栗堂

霞

き里れ麦や萎るおや相履 おかつ
砂系やあふ縁とる夕守と 留泉

里あむ父ア哉松乃さうりが 野水
鳥子もたけや二玉のふれ勝 春來
鳥小毛 社の羽ふりや父のそみ 菖狐
ふこ洞 齋 定く親父のし 梅
あまけりさぬ様乃木そ染さ 梅那
猫のゆくつ田の 疇や 夕履 靴舟
まゝぬるおふ味りいや胡うすえ 太布
きぬくやとるに 齋き妹 春山 如雷
日と様と舟書あむ父ア哉 柳水
八景の 名一のす取之井の 澁 不言

陽を遊糸

枯芝やや陽をの一二寸 とす取
 陽をやほろくある岸の砂 甲賀 去芳
 いとゆふふ動くや去年の古寺 乱縁
 佳くくと糸遊や字のむよはき 万賢
 陽あふふ忍ち干る才の白ひのち 普船
 けしエふに鼻あさむる地ろ 涼信
 陽をや鞠ハ跡垣とたも 梁山
 かまゆふや高鞍系 深井上 曳尾

陽をや糸結けけ 系角
 松戸を陽をのほろ 其礼
 かきろふやいのちを忍びつく 養兩
 陽をやあふく柳小泊 芦英
 うけろふやけさ 瓦竈 花跡

春夜

葉毛やきんこ 芭蕉
 去りくく 梅
 去りくく 蕉

海棠の花ハ 満きり夜の月 普
 之月乃 梅より 斜に 不
 梅 折まき 岩のまも 動く月 外
 けい 一や 在の月 夜山 さく
 之月ハ かくれて 柳の 烟の
 一を かくり 春の 宵の 害
 角 梅 邦 心 狂 窓 角 麻

朧夜 朧月

続くごも 欠えりや 徒の 梅 鬼貫

猫の 恋や 心 国乃 妙なる 月 芭
 木 ちろ 萩や 白くて も きき 春の花 兼
 あま しまし を けりめて 春ハ 続也 史
 味 雪 夏 の 暮るる 白ひや 朧月 史 邦
 神 暮るる 春 ぬ 夜と ちハ おろろ 左
 勢 の本も 志ましく け 控は 春月 紫
 とく しく ゆく あまき 春に 続く 希
 雪乃 月も 啼び あそ ち 貞
 佐保 娘の ちり 詠 詩や 朧 月 梅 郊
 月 ね ちろ 石 竹 露の ちり 所 栗 堂

花乃香の何となく小枝
月 雀 舟
吐 風
新 蕙 毛 虫 涌 々 々 然 丹 平 砒
統 夜 や 縷 の も ぎ ぎ 系 柳 万 古 砒

春 風

之 日 月 や 何 不 下 の 風 も 喜 の 風
其 葉 如
喜 乃 風 亦 小 喜 と き 々 々 々 々

遊女の面子

春 風 や 柳 の うち も け ぞ ち ち 玉 園

春 雨

其 白 や 毛 ぎ 山 人 の ち ち ち ち 貞 室
ま ち ち ち ち ち ち ち ち ち 来 山
春 雨 や ぬ け ぬ け ぬ け の 様 々 穴 丈 柳
ま ち ち ち ち ち ち ち ち 桐 之
ち ち ち ち ち ち ち ち 東 来
仙 小 ち ち ち ち ち ち ち ち 雨 柳 楓

喜苗やうつくしうきる地たるり
 春をやも所まらぬ海のき 珠五 ちよ尼
 常ふ足ぬ梅や新得たまるる 栗堂
 さるやうけてききる清のしき 梅郊
 切まを積ゆく舟やまらる 平砂
 けるるや西よふ昆布の羽心 五種
 春雨や降あうら干る磯乃け 宝馬
 捨てて一花も芽一きゆる 五梁
 雨一振春のころに成く一る 晋窓
 ばのまきく焚地も雨にたのび 乙外

足えそふるきと山ともとまのる 羽五 素盈

雛

地うふときげハおとろ 雛の色 芭蕉
 うつろき顔かく雛の誰うを 其角
 人殊一雛を告る犬のろえ 轍士
 刃ふるひふちや此雛のみとちけ ちよ尼
 雛啼て去いろく此まともる 岸虎
 何をえてあいの紐やあ乃 雛

乾坤を我もの夢や世の乃 雖 吳朝
 られまぬの月小く山声や園の 雖 其葉
 雖 啼や旭乃くやき小松系 花 城
 世も山も二月小ちりぬ 雖 のこゑ 不 遠
 谷の戸は 蹴てゆる 雖 の羽吉也 松 水
 ぞうりけて 雖 のぬふれ旭よ 沾 涼

鶯

世のつらき鶯花や園の竹 伊勢 一

鶯やまんな丸小出る夢のよ 梅 露
 うらむまの一事も念と入ふ 危 利 牛
 鶯乃啼けハ何やらなうら 鬼 貫
 鶯や鶯とさするたは 桐 一
 鶯や竹の枯葉とあゝさ 荷 兮
 うらむまやたや一夢の志こり 松 石
 鶯の写口ハ竹を志し 乙 由
 うらむまの思ふき声や 希 因
 鶯も枯きる中のなちこ 曲 菴
 鶯やいりさ引 伸す 志乃中 旧 室

嘗よ竹お在はうハのそら
 うらひすの色や急ぐ風ゆめ
 嘗やいすゝる雨戸はあはれ
 山よりひすやあきき山の眉と引
 嘗乃喜もあはれや朝ほろ
 嘗の竹ふあからぬめる日か
 うらむおほくく返秋まゝる
 嘗や丁名ゆく水の初らうこ
 嘗や川径よてまのまら
 嘗や色あややふ上よ藝
 蒼狐 秋瓜 佐保丸 楼川 小知 雀郎 蛙声 千外

うく白守の去らむる日の和か 津富

雲雀

晴天小野を引く
 嘗二はまき日毛頂上のむら
 舞あくるもる存やいつて
 暮る月小ア又尺言る
 る微ちり中存ふめらる
 那の度成のほろとて又ま
 蒼狐 呂龍 存義 丸室 雀舟 花縣

舟を帆小引揚て危き老翁 道橋

柳

青柳の眉かく岸の歌^{伊勢}家^古武
入相のすくく残えはる香^伊原^古が
おもひ出て抽^伊ま^古のりまき 柳^和乳
青柳乃志^一さ^吟れや^坡鯉の^紅ま^線ま^赤赤
げんろりと見の^紅あ^線る^赤ま^赤る 柳^坡が
宿やあ^紅る^線柳^赤く^赤ま^赤て^赤引^赤て^赤ら^赤る

旭二分糸の動くまはは^為ひ^分外^兮
詠るく目の^月あ^下臥^下如^下柳^下く^下家^下
新室^貞〜^佐投入^貞糸^佐 夜^貞の^佐壁^佐
青柳や二^柳筋^居三^柳ま^居ち^居老^居木^居ま^居り
ま^宗柳^瑞小^宗ま^瑞は^宗ま^瑞か^宗る^瑞よ^宗星^瑞月^宗あ^瑞
あ^蓮の^之目^蓮あ^蓮柳^之小^蓮似^蓮る^之枝^蓮ま^之れ^之
青柳や細^古ま^古き^古ま^古く^古ま^古る^古乃^古色^古
青柳や^栗揉^堂ふ^栗ま^堂の^栗あ^堂〜^栗ま^堂れ^栗後^堂
古^龜巻^仙や^龜柳^仙み^龜え^仙あ^龜る^仙あ^龜の^仙いろ^龜
う^玉ら^圃ひ^玉ま^圃る^圃あ^玉ま^圃ま^圃ま^圃青^玉ま^圃の^圃柳^玉が^圃

春柳や見てあはらちも伸るる
 詞ふふ平と足はる本柳一は
 ちきや表の柳はくくく色
 明ちのくくくみ随ふ柳一は
 又くふはくくせくは柳くを
 老妻かへらおろきむとねくく時
 別あはらち柳も似ぬ整くくくら
 心 祖

椿

ほき挿除くくく椿あより
 一ゆらちくくやにうくくの赤椿
 多のきも終は家陰乃あり
 存ふふくくくくくある枝くは
 両指てくくくは落るはくく手くは
 折る椿花をちあうくくあるくも
 落際子残る念たは椿か
 落くてもくくはぬは八まのを椿
 花椿落ても蜂ふはれくく
 何くく桑のそくくくくマ花椿
 孫 坡
 左 未
 支 考
 心 祖
 養 孤
 龜 文
 春 郊
 貞 川
 沾 哉
 李 門

押あつて落るふひくく栲が 笠齋
赤椿ちる時るのきくく 津富
吹ふくちさくぬ口あも八重栲 花縣

海苔

花誘ふ荒やよきおさく海苔 風虎
まろくは波とたねや栲のり 佐佐良
ゆく水や何ふとまる海苔の味 其角
細の目く凡や海苔木の丹穢も 井風

初午

初午やうらりの乳母を夕月夜 沾徳
初午やほのめく祢宮竹黄八丈 柳居
初午やあつハ茶屋も神一 蒼狐
初午やのほれはらるるお 酒雨
初午や戸屋も梅の掟書 存我
初午や菟布ふ山椒の神やけ

郊行

初午やうきくませらるもけ日くら

梅郊

涅槃舎

涅槃舎やまの物そそき法箋大坂後佐
鐘の大声きれ祇園大坂希因
涅槃像天下に昼寐けめけ矩刈
心とくし寐の姿教えて涅槃は涼徳
結句人もたすのぬもの之祇園像心誰

祇園人云や釈迦ふ念仏とまじり日 蒼狐
佛ハ世哉木とい寐死得枕 伯幹

彼岸

何道の彼岸の入り人ふりり 鬼貫
櫻はくひとくは弥陀の彼岸は 支考
極楽と見えそゆるまうんは 報彼
寺も寺 証もまこゆる彼岸は 梅壽
寺ありて櫻一本乃彼岸は 枝靜

羨ひをよるや彼岸に雲の波 羽乃 柳童

授記品 無有廢事

曇るア〜の階うて彼岸の夕日影 其角

苗代

苗代小待事 阿るや 夢乃首 才磨
苗代とておる 春の信ふ 交考
苗代小急くぬ 水のそくこり 子英
な〜ろや 二玉のや〜れ 乃次 地坡

苗代や 姉ハ子月 々阿るり月 存義
苗一ろや 水を板強く啼 蛙 在舟
苗代や 動くぬ 水の朝く〜 花 縣
空定〜 苗代水のま〜らハ 真 市仙

葉花 葉蕨花

葉花や 戸口こつて 母乃乃 裁中 嵐青
さの音乃 望まふろ 川口 新介 傘下
い川のまふらぬ けの男 花 大根 貞佐

菜の花の世界ふくやの日は 大坂 淡々
 舟の香やあつらふ利根の川通 玉圃
 葉のともれや小西の中み蝶小てふ 雀舟
 あまろのや菜のむばりけき白文 芝水
保川本坊より
 橋をみ菜の花つら舟わく 宗瑞

芦角

川淀や泡を体むる芦の角 伊賀 猿 雖

角らうー芦間の葉やふくまの 梅壽
 水はもにまゝあつらふ利根の 龍昇

燕

今更さといをぬらうりの乙るが 塚 長之
 燕や懐祇の波と清まると 喰 貞佐
 己の才と為してまらふまゝか 心 祖
 清はくらやまゝくまらふも人まゝ 龜 文
 燕下管の踏ゆくもまゝひらね 梁 山

ういぢきこ乙きさきー岩の色 五梁
はいららも傘尋る花 智恩院 祖徳

帰序

あふれやあうつきうらにかあふ 鬼貫
まらぬー 戸とたえとあふれのを 所あ
ゆく原の連まらう戸戸湖の縁 素竹

送別

戸のあふぬくと何 百里 文考

蝶

蝶遊ー 比ハ恙るそのひとひが 湖春
蝶の飛くうのりあ中此日新小 芭蕉
夕日影町中小飛こてふこのを 其角
るうりやあひまき故蝶のよまふ 貞佐
道其小落てハ語ー 凡此蝶 宗瑞
魂のありとをもんま凡乃蝶 公祚
のと、はや大河をける蝶一つ 蒼狐

蝶いう小つ虫あそそめき風情ある吐鳳
 蝶くや人小忍ありくとんるの子玉圃
 むの子凡乃けしめや飛胡こ小秀億南郡長
 のとけしなまけまふとちるる存の蝶群長
 蝶くや何とおかの井乃あると宝馬
 てあくや田をまくくるのあうしろ花跡馬
 大寺の衣静るり石く蝶、

お蝶とる猫も夢くく然らか如貞

画讚

蛙 墓

よをついて款中上る蛙のか宗濫
 ちく心あも其さまよ賤し墓笑意
 古池や蛙飛ちむ水たん名を以成
 宴うしこ蛙啼江の岸の数其角
 之田川もみらや朽て赤蛙才磨
 たもふ事たまりてあるを墓曲翠
 結構あ見と啼言以蛙のか鳴乙由
 蛙啼一おく小羨をし蝶羽

啼うらも花をかまの蛙をか
翠羽
又よを庭井の蛙田のうら
栗堂
田やめらむ蛙の舌も水の泡
公曳
るの目とをらひ蛙押さつれぬ
蛙声

風巾

夕暮の物うき雲やいりのほくと
女誓
吹けくと花小欲なり
ちよ尼
かけくくる心やうやいのほくと
素推

恋

侍言やあささつれやの几巾
蓮之

接木

伴波孫鬼ハ腕ハ付くを毒花
旧室
接うけし松の家智やむれ兄
袈裟
たまさして接木小花のさくらが
婆面
花を根小節して咲し接木が
佐国
是未な接穂さし取の物けき
杷菊

花

さきまくとほりむらさき山 貞室
 あらむとて花をそひり 頸の骨 梅翁
 みきりやハ花をほく種山もまし 京 友静
 奥山や獨笑もる 花のう不 兵衛 之政
 七執のちらそや余はふふの花 蝶子
 岸らまといけるき花の 林のれ 信徳
 花の陰窟ふ似る 猿 福了南 芭蕉
 世のち清も上野をほふを

花より風静くまてかけ酒の泡 嵐雪
 若しのまげ身をとるちふ並るるり
 ちささうの子ておひりちぬうを 其角
 らもる日やお平れ花の北おもて 猿 稚
 柿の葉は若くゆきり並まやぬの中 加賀 北枝
 暮布古しよししくちまも花は垢 杉風
 花さうり大腹中ふたるけりし
 何事そ花見る人の ち 刀 玄来
 山や花垣根くこれ酒をまし 亀洞
 静の肩乃埃もや花はうり 香吟

ちみすて 曇りくさるる 心のか
 花の雨小神 惜うて ゆるりや
 是おて 聖のむすの 競ひか
 世の山 何処とらまて 飲よまむ
 花はくもむつうけりる 老あひ
 苔の山 滅の下戸ハ 壺まの 紫
 死さる人うふる ちの山
 花の口や入相の 積乃 唱て 浮
 藤の事も下戸ハ 下も 花の 陰
 存分 小見よとや 花の 夕あらし

春 来 狐
 桂 坊
 木 節
 晨 風
 横 儿
 氷 花
 川

こよ 神やむの 川 小人の 家
 不二の雪 まくく 續く ちくも 包
 咄し 女 斗むつ ばり 苗ちの 花
 校 紫 奇し 花 ちむる 人ころ
 朝 中 記 花 乃 中 ゆく 及 者 哉
 内 戸 内 ち 屋 ち 山 ち 幕 帯 隣
 江戸を ち ち 花 乃 角 力 の 觸 ち 被
 ち ち ち の ち ち ち の ち 花 け 人 ち ち
 花 老 ぬ 口 ち ち 近 乃 加 祇 の ち ち
 ち 小 人 誘 ち ち ち ち ち ち ち ち ち

越中 麻 父
 梅 邨
 龜 文
 梁 山
 雅 邨
 公 史
 素 芥
 順 翁
 不 禪
 木 丹

わされぬる筈はまてし新らもを
 左 簾
 年月や花の明るに待乃 裕
 花 際
 入海ハ踏くらうり花ととも案
 仙 里
 いさましく晴て夜明の花子か
 秋 方
 旅籠屋と出らふ花のより地が
 平 砂
 海京や花不同と此一くもり
 沾 涼
 國くの同帳も篝の徳とや
 五 種
 茶と煮る花むのふもと老女ぬ
 芝 水
 む晴とる旅の朝出乃馬此に

考てあそむるも花の山 雀舟
 草枕旅ちるぬ人そ花のかき
 玉 圃
 下戸をハち〜月夜のむれ味
 宝 馬
 出て見れハ出ぬ人ハ〜花らも
 色 波
 心と川目と志め川ゆらめ川む

車教婆小町賛

花の色ハ川に花夏うなきれ景 季 吟
 優婆塞ハかひて足跡や花の雪 蒼 狐
 よ〜中〜お〜は〜く〜け〜て

樓

花とやる 樓や夏のらき世もの 丹波 きて
 賭りて浮出され色さうらう物 支考
 事てふれハ眼ふ半かくや山 樓 方營
 ちうらく 碁のさめらるる 夕さうら 自悦
 明星や樓定めぬ山 一うけら 其角
 初樓まゝ 遠く小 雪けハ古そ 伊賀 利雪
 系さうら 別 ちきふとまの 為 伊勢 終く
 やとる 末も其樓とく 一 山 伊勢 終く
 山 終く 伊勢 終く

ちけ入れハ人の脊戸く山さうら 希因
 陸樓ありおハさうらもちる念 蓮之
 何ふまゝハ人の初まをさうら 樓 ちよ尼
 又ぬものさうらとて 娘く 樓 一
 連もなうら 松の命を山さうら 曲菴
 目さすや 塔て又うら 滝 樓 旧室
 障を引て 虹のそめさうら や 聖さうら 女君狐
 うけさうら 木さうらくものを 初樓 心 袈
 寺いよく ちうら ちくる此樓 一 存 義

塔さして橋為はく末の百北 栗堂
園ありてはららゆるめぬ山語は 一
ちる人を地へてるれさらくは 雅邦
橋よりおのや 生るる山唇 凉山
初橋はく子ら眼おはまこふし 沈亮
片くもあふむと楼乃手際か 吐鳳
袴さるる匍匐人やさらく陰 玉圃
あふやむあく風の洞はら 芦皓
まもらえて雪はまきし楼うか 燕志
もろくのうしく橋を貴地楼 蛇田

初くもと橋小の草簾に余情は 田機
あふとてあまきり小白くさく花 窓雪
よの舟を一反おむ乃はらうる 宝馬
晩鐘やさらくあつきー物くは 津富
さくけけの時山の大笑い 千外
人訓て橋へちりけり山依るを 在轉
山さるる老を足えくはは橋 霍郎
おことさす 風狂乱乃焼さく 梅森

小町像賛

出代

出くろや雅うろふ物あしき 嵐雪
 お代やまねこのあもりあ斗 己ん
 おかりとけふふ物とあうおま 涼菴
 出くろよよ昔義了古き造りち 宝馬
 お代やまねとけあけるひうー山 素人
 おかろるや雅はるいせ下女う名も 五種
 出くろよやなるハのまをを惜まうと 佐
 おかろりの去るやいさむと只那 志云 雲風

雛

雛買ふいつるせを雛二日月 貞佐
 物うろりおろく雛此る夜也 宗瑞
 紙雛や着立出て峯の毛 貞山
け依若温故集二白雪と守ハ非也
 尺女虚を天の下く雛遊け 桂坊
 雛抱てたうして八重のすうさ 春菜
 男ひかやとまねれぬ才も細工 竜文
 代雛の妹背や恋ふ味き 梁山

何となくかゝる時世や嫁の雛
 純亮
 男雛やさける時こそ女夫連
 好義
 九事と八事に飾るや雛の壇
 雀舟
 雛市や山のおくみも女乃子
 味富
 お生の松乃若世や男ひれ
 本丹
 侍のかりつて吉しゆつり雛
 色我
 我ひなや三等ふ七等れ立姿
 花跡
 夕ぐれの雛うけきくそ急
 花藍
 心好て雛舞くくちり人の妻
 平砂
 小姓こそ吉孫むまひや母れ雛
 一

詞事らりけりよし

石女の雛うけくそあそぶるる 嵐雪

妻小おくりし時

夫ぬ雛娘の同くいゝきむ 達暑

孫娘を考ひく

宿をおて雛忘るれを枕のむ 猿雛

枕花

垣の枕結きぬくこれ盛る外 蚤山

校少りふ力も足せぬ松のむ 春 狐
 砂水の勢むつ岸一や松乃を 芝 光
 晴瓦や能く造れしものむ 春 邦
 細中やけさの候乃松のむ 雀 舟
 日くらしを麦ハ肥より細れ松 貫 太
 雲も今くたふてし松のむ 操 舟
 岨山く松の初花咲ふくより 素 登

曲水

曲水や岩ふえつ但おつ 希 因
 如きや塔を琴心く柳 陰 春 邦
 曲水や夕アハ花もちりめし 平 砂
 曲水や坤の山くろに 硯 平 砂
 吾を流さし 流やけく 風 舎
 上着のねあや 碓もめく 亀 岱

以 丁

八鹿心秘と陸とのゆに 北
 京 友重
 加る能くして 浪海へ寄むゆに 北
 京 如泉
 昨幸の鏡とらるる 志ほする 希
 因
 波凡ハ松ふ 乾くぬゆに 干のな 蒼
 狐
 け 廣さ 夏 入るる さく 此 一 系 干 外 吐
 鳳
 屋 舟の ちとくも 喜 ぬる ゆに 北 津
 富
 久 浦の 花 や も ぐら や 以 干 猪 木
 丹

小引列

菘くくる 矢 礼 や 雀 小 引 引 或 吳
 龍
 揚 州 の 草 麻 片 く ま 小 引 引 北
 亮

海棠

海棠 や 天 葱 刺 子 此 龍 の 色 希
 因
 盗 心 と とも ち ら せ 賊 け る 花 此 ぬ 蒼
 狐
 海棠 や 春 ふ 出 る ぬ 花 け け り 梅
 壽
 海棠 や 入 ね の 種 も つ 久 花 け 方
 簾
 海棠 や 一 心 づ くる 不 服 と ぞ 木
 丹

梨花

夕月や島さうに 梨乃を乳 梅却
雨ふよー風ふちやる 梨の花 花菱
月牙し夜やあり 梨花むの重 雀舟
梨花一枝心何りけや 園乃床 存義

躑躅

ぬきふやあめの下てる 姫はし きたて

山はし海ふえよとや 夕日影 智丹
穴窮 屈な庭とそいさし 岩つし 佐湖
時節来て湯の山はし 嘆き危 雄詠
一株石の活る 片々 紫鳳

菖

松よ菖 蝟木ふ乃ちる 菖き有 梅翁
子外て寝る 丁ろや菖のそ子 くと茂
風なくて 静 菖さうられ花 杉風

春の日は底加けとて 春の たな 存義
春の日は底加けとて 春の たな 存義
春の日は底加けとて 春の たな 存義

亀戸社小詣てし比

春の日は底加けとて 春の たな 存義

山吹

山吹や字流の糖炉は白く時 芭蕉
一帯くと山吹更く夕へる家 襟雪
る柄抄ふ山ふ記さける流まは 心近
山吹や旭はしる水の色 栗堂

而志のう山ふきれ東系先とらと
 やふふやるをちやつに咲くは
 山吹のちきとる意清ふなうれは
 山吹ふ弱とめよと花丸あをう
 邊橋 李克 青芝 卜人

莖

何ころはくぬおと子の莖のれ
 一穂や折おふのせしそみき州
 山後まて何やう新すは茶
 忠知 鬼貫 芭蕉

焙福のちるあとねまうれいな
 こころたしやまこころのうくの狭箱
 古信くし押ふは笑越る莖のふ
 茶をき出す乳母のちりや莖竹
 大糸らられた中島のゆらんを莖茶
 蝶のねら白きそ葉のまはるは京
 山やましりや花火種まうさくさ
 野水 蓮之 希周 素玉 一巴 風舎 左筆
 曲水

ていそ成茶のまき成尋よて

まきし州小隅あらひりしや乞

蚕

むらかして天下ふさぎる蚕は白き

宝馬友々ふゆの

後命ふそ母の機織もかひに時 蒼孤

櫻鯛

かゝりし歌ふあゝ八洞をさくく鯛 梅翁

庵丁の何なるやあゝいづれたい 未得

春 四十

むらむら細いてはくく鯛 貞伸

花くむらむら北なるや櫻たい 素玉

糸けてこやはくくまれさくく鯛 操舟

白戸もききやあゝ鯛乃山さく 花跡

小船 吸船

砂川の度ふかけろよ小船のふ 純亮

岩あふとあゝや小船乃一ふらふ 平砂

舟かまゝとあゝる船や水ひらく 山蟻

混合

世このものまへき音なり 源り指 守武
 宇治の茶や浅香をぬと花うつも 伊安
 人の親乃鳥返りり 花の子 紫つら
 何斤かのやまは茶事にも喜のまゝ 堺、
 なすれゆく水や氷をまをるるま 成安
 鴨の丁急すそめてさり 山崎が 式之
 いろ／＼に名もむつりやまきの竹 弥 碩
 ままきり 持るはさるん内忘れ 泰 徳

多るや小入相違り 峯の寺 心 袿
 雨とくはて星さうり 望の木芽が 喬 里
 たんぼや誰ま所と尾れあと 佐 若
 筋ふそ花あはれはさうぬる 故 蝶 春 邦
 田を厂の足あとおもそころう 孔 雲 梅 壽
 ちる花やお望ないま忍ふ心 貞 知
 傘持も片子業こや小松引 純 亮
 芝能や新とるこて梅さくく 禪
 うら 鐘や定所の残る曲突の上 不 禪
 不 蕨や十口のもふ 十 乃 振 存 義

梅の香小酔ふ危いころの蜂の色 羽 百童
 積塔や河系小いてく君のる 律富
 独活うらの香さゆる日や屋敷町 套取
 蜆とる比や川州の砂のいろ 素芳
 草乃戸や暮し花壇ふ蔭の蔭 色我
 紅白の花花為葉や勢あもせ 谷梁
 晴糸供や女中れ鼻の言雄山 角鹿
 水口や溜り小志すぬ帯れ衣 平砂
 不つらうと山の夕日や二日 矣 木丹

春 四十一

春 雜

かろくまぬ屋敷く北梅柳 芭蕉
 雪ふ小中つちゆいよひきかへ 其角
 水くさく流るや清雪かたろ月 交考
 木瓜蒟蒻 核して又くおはるぬ 山店
 見あふれハ梅ふくくも又何ゆる 栗堂
 山吹のむ乃お不流也 又 煙 素山

憶芭蕉翁

月花や洛陽の寺社残りたろく 其角

奈良ふりー以南大門のりうにて
学乃瓦落ーやうめれゆふ 蒼孤

暮春

仍来ととめー者乃ちうう痛末宗般
花兒ふお望くともやきれ来 亦得
おろるをを白酒賣の名残が 交考
口くせのよー世も来の仍来が 終
仍来やを看ハ残寸思はくー 希周

春 四十五

ゆくまを踏るも啼まのあー也尾出音
仍来やをらう不る小雲がー 兰夕
山とく海ふき影ー 雲の来 花城
まをまをや名残をうれ角の沙は 笠歌
防け花は生れまも月乃ら 如雷
仍来や蹄猫の腰も恋れ果 秋色
雲かま心をもたも春の名残が 高岩 霧水
又まを惜む之十日と成ま急 不言

誹諧古今句鑑 春之部終

附録

春之部

一陽井素外

かーこくも月日のまきアこつれ朝
西のこちと静中爽の 旦哉
流らう那鶴さくいねれあけえとそ
門妻やえーうりなる三日乃月
葉摘等み指さるれさう若葉指
片しとさぬる雪も暮るも爽の夜乃

雪供 仍アー罪もきえぬへー
鶯もほよき梅のけりや祭
梅けくや人めもくさそ愛うそ
咲源む梅乃古ひや江れ色
菽入の爽をえの友や軒の梅
あゝれ芽ハ小雨ふる日の辰哉
若叶やさくららるもの 芥 萩
そのとさや爽めく城の小表
叶の爽野風短小扇足初危
春も急てたてると夜明の山乃美

おらむときれと遊ふや雲の水
のとけしな草刈も藤川牛も鹿つ
らきまおれ川ねそつれく 北
視ひゆく人や堤の雲かそみ
陽空や砂を記よせし梅もと
初らぬ小梅白一夜や月小暈
おろるあ八月小まの入りくら
あはもれをう記あらし 朧月
枕して小るふる日を 宿は春
明る夜残ふりきる夢や 鉅のま

人喜小言遊る志川ののけよ
言や相ねと人うきましを
神影日も夕アをり伸初む
凝とけて言端さ記柳まきえ危
と川ふちと日も入るこの柳うき
月ひひこ顔の神れあさや、は
志様一アんはれ北すうれが
早蕨や葉小世風の信うら
あつらぬの歩まや芦の角
行らや破乃きまのくるれまら

乙多れ来りや光陰矢の如し
由れ花露やき寺れ彼岸証
蛙侍くく月ハ物を共ハまる
阿ふ見下啼死いふ子の遊蛙
足曳の山田乃かろ川をひ出ぬ
梅乃くき里冬やいの好けり
接穂してあふれや雨二日
接穂又てむハよとくぬ心
ゆやらぬをさも花乃幕
まて又れハ花の山寺人恙し

春
四十六

後夜も今月夜の花れ白ひが
月影の風なき花乃ちるお小
親と子無一本とすれ花の陰
る風のまはるる記さぬ江戸れを
多小知る号弱人や山さるる
汗さるるや志序く人雛の小人形
吹雛や日和またゆき目鼻立
きく松小山蟻乃ほるけりさよ
まらぬるき戸やゆ平の岸れ松
小貝拾ふ人も多よ記ゆ干のち

亦恨むいろや斜日の梨れ花
去る夏や新瑞ふかる荒や一ろ
雪初るまをれや叶の清さをつれ
夜ハまゝ一蚕飼まゝ家の板を
亦謎小一枝ありや片々々 鯛
孫ともふまゝめられてそ主生念仏
言の丁念ね 孫るやとむいなる

睦月九日湯島の 市神小治川以日
春のよち々々

市梅の花小むらさきとや春乃冬

幽栖

我ふの春やまじり日乃何ごとく

言を一葉仔細おゆ人を送は

とふまの徳や春ふも余を又者

花乃は糞子ありる方ゆく

折灯て近しいは静くし家内々々

律富うちの玉よゆく時送る辞をて

ゆくハまゝ夏つてむらさき 菊ひ顔

上列大同くの人よりむらさきをくれて

葉の芽やつめくも若きうしろ付

附祿春之部終

春四十八

